
こてつ物語 3

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こてつ物語3

【Nコード】

N8317S

【作者名】

yuki

【あらすじ】

こてつ物語の3話目。

御子と良平の結婚式が近付く中、良平の恩人の義足作りの職人の命が狙われ、式に出られないと言われてしまう。困った二人はこてつ会長に相談し、礼似と土間が詳しく調べる事に。ところが礼似の妹分になりたいと言う、妙な娘が現れた。

この話は私の個人ブログに連載していたものです。小説&まんが投稿屋様にも掲載しています。

御子と良平はこてつ会長と向き合っていた。表向きは来週に迫った結婚式の招待と報告。と言う事になっていたが、今、二人は会長にごく個人的な頼みをしているところだった。これが受け入れられなければ、二人は式をあきらめるつもりでいた。

「最初に狙われたのが十日前か」

「そのようです。これでもう五度目です。うちの組員だけで守りきれるかどうか。この方が出席して下さらなければ、私達は式を挙げる意味がありません。何とかして今の状況を解決したいんです。お願いです。ご協力いただけませんかでしょうか？」

良平の訴えに続いて、御子も頭を下げる。こてつ会長はうなずいた。

「たしかに今となつては我々も、彼に頼る機会は少なくなつた。しかし彼はこの世界での功労者とも言つてよい人物だ。解つた、協力しよう。何故、今更彼が狙われるのかは解らないが、さっそく調べた方がよさそうだ。この件は華風組の方が詳しいだろうから、土間に調べてもらうが、護衛は……難しいのであるうな」

「ええ、土間は刀に近付きたがりませんから」御子が答えた。

「ではそつちは礼似にやつてもらうか。周辺にも組員達を置いておこう」

「お気遣い、ありがとうございます」良平がまた、頭を下げる。

「いや、この件はこてつ組からの彼へのお礼だよ。今のような時代になる前は本当にお世話になったもんだ。ここで義理を欠く訳にはいかない。真柴は今、式の準備で忙しいだろう？ お前達の身の安全の事もある。こういう時、この世界では油断できないものだ。二人とも落ち着いて準備を進めた方がいい。土間と礼似には私から伝えよう。この件は安心して任せなさい」

会長の言葉に二人はホッとして礼を述べた。幾度も頭を下げなが

ら部屋を出る。さらに建物から出ると、御子が口を開いた。

「私達が自分で調べられればいいのに」

「それはやめた方がいい。下手をすればかえって迷惑がかかるかもしれない。会長も言っていたらどう？この世界では冠婚葬祭の時間が一番危ないんだ。華風組はそれで何度も痛い目に会っているし、会長さえも奥様をそういう席に連れてこない。もちろん隠しているからだろうが、可能な限りこつちの世界との接触を絶っているじゃないか」

「でも、うちみたいな小さな組なら……」

「小さくてもうちもこてつ組の傘下だ。こういう組織では小さくて弱そうな所から切り崩すのが兵法の初歩だよ。俺達の事で会長に迷惑がかかったら、申し開きの仕様がなし。ここは会長に甘えた方が得策なんだ」

「小さいけれど弱くはないわよ」御子が不平をもらす。

「解ってるさ。だけどそれはよそからどう見えるかの問題だ。もう、お前だって正式に真柴組の養女になったんだ。自分の身の安全には責任を持たないと」

「私は大丈夫よ。五体満足の上、千里眼まで付いてるんだから。」

良平の方こそ心配だわ。義足を預けてしまってるんだから」

確かに今、良平は義足を付けていない。御子の肩を借りて歩いていた。

「だから会長にお願いしたのさ。俺は自分の花嫁を守るのに手いっぱいになりそうなんだね」良平が少しおどけて笑う。

御子の方も照れ笑いをしながら

「そう？　じゃ、しっかり守っていただきますようか」そう言っ
て良平を助けながら、待たせていた車に乗り込んだ。

話は前日まで遡る。御子と良平はビルに囲まれた小さな建物にある、とある職人の工房を訪れていた。

「倉田さん、こんにちは」慣れた感じで良平は職人に声をかけた。

「ああ、良平じゃないか。おめでとう。招待状をありがとうな」倉田は機嫌よく答えた。

「倉田さんには是非来てもらわないと。今の俺があるのは倉田さんのおかげですから」

「いや、これだけこの義足を使いこなしているのは、お前さんだからこそだよ。俺はそのほんの手伝いをしているだけだ。どれ、さっそく義足の調子を見てみようか」

良平は義足を外し、倉田に渡した。

「問題はないようだな。良平、出来れば義足を二、三日俺に預けてはもらえないか？」

「どうかしましたか？」

「実は、この義足の予備を作っておこうかと思ってな。寸法を計りたいんだ」

「別に今のところ、予備が必要な事はありませんが」

「そうだろうが。正直に話そう。俺は式に出ない方がいいかもしれない」

御子と良平が顔を見合わせた。

「なぜです？ 俺たち倉田さんに来てもらえるのを本当に楽しみにしているんですよ」

良平の言葉に御子もうなずいた。

「その気持ちは嬉しいんだが。どうも俺は誰かに狙われているようなんだ」

あまりの話の飛びように御子と良平は目を丸くした。

「どうということですか？」

「先日、交差点を渡ろうとした時に赤信号を無視して突っ込んできた車がいたんだ。とっさによけたがその車はそのまま走り去っていった。その時はただの暴走車だと思ったんだ」倉田はそこから話し始めた。

「その後、今度は通り道の看板がすぐ真横に落ちて来た。ついて無い事が続いたと思ったよ」

倉田は一息ついて窓辺へと歩いて行った。そして窓を開けると「おとといの晩に俺がふと目を覚ますと、ここが燃えていた。火の気のない場所だ。すぐに消したがもし目が覚めなければおおごとだったろう」

窓の周りには、黒く焼け焦げた跡があった。

「さすがにこれはおかしいと思い始めていたが、今度はナイフで襲われた。俺だって昔はそれなりに腕があったんだ。そのくらいならよけられる。ただ、相手は逃がしちまったが」倉田は歯がみする。

「そして……。今朝はこれだ」倉田が指を刺した先には、弾丸の跡が残る窓ガラスがあった。

「俺も腕にはそこその自信があるが、さすがに飛んで来る弾はよけられねえ。これじゃあ、人様のお祝いなんかいかれやしねえよ。それよりも俺が無事でいるうちに、お前の義足の予備でも作っておこうかと思ったのさ」

「だって倉田さんは今は刀研ぎの仕事はしていませんよね？ こっちの仕事だけじゃなく、美術品とかも」御子が勢い込んで聞く。

「もちろんだ。そもそも俺は美術品は扱わないよ。人斬り道具専門だった。だからやめて義足作りの道を選んだんだ。いわゆる罪滅ぼしって奴さ」

「じゃあ、なんで今更倉田さんが狙われるんだ？」良平も首をひねる。

「解らんね。ただ、今はともかく、昔はそという稼業をしていた俺だ。どこで恨みを買っていてもおかしくはないさ。こんな過去を持つ

っている割には、長生き出来ていると感謝しているぐらいだよ」
「そんな気の弱い事、言わないでください。誰が狙っているのか必ず付きとめて、倉田さんに手出しさせませんから。是非、俺達の式に出て下さい」良平は説得した。

さて、倉田にはそう言ったものの、良平にあてがある訳ではなく、真柴組と倉田の付き合いは倉田が義足を作り始めてからの事なので、その前のいきさつなどはほとんどわからない。倉田は以前、名うての刀研ぎ師で、やくざ者の人斬り道具専門と言うことで知られていた、らしい。その頃はこてつ組や華風組などが、質の良い名刀などを倉田に任せ、かなりの信頼を得ていた、らしい。そして倉田自身も砥ぎだけでなく、かなり刃物を扱っていた、らしい。

当時からの古い恨みが絡むのか、倉田個人へのもつと単純な恨みなのかさえ分からないまま、式直前の自分達がかかわるのは難しい。まして相手は銃まで使っている。ただ守るだけでは無理がある。明らかに原因を探る必要があるのだ。

そこで二人はやむなく、こてつ会長に泣きついた。と、言う訳なのである。

「と、言う訳だ。お前達にとっても御子がらみの一件なら気にかかるだろう。土間は組の古い幹部達にでも聞いて、倉田さんが狙われる原因になりそうな事を調べてほしい。正直、倉田さんの事はこてつ組より、華風の方が詳しいだろう。礼似是倉田さんの事を守ってやって欲しい。彼は今のように、銃だ、ナイフだと振り回す時代になる前の我々すべての恩人だ。しっかり守ってくれ」

こてつ会長に呼び出され、これまでの説明を、土間と礼似是聞かされていた。

「この件に、今、真柴を巻き込みたくない。この世界で身うちが集まる時は注意するに越したことがないんだ。土間、お前は良く解っているだろう」

「……ええ、そうですね」

「礼似もなるべく倉田さんについてやってくれ。こんなに短い期間

に何度も襲われると言うのは、彼が今度の式に出る事に関係があるのかもしれない。もちろん周りも固めるが、一人若い奴も付けるから、面倒見がてらしっかり守ってくれ」そついいながら会長はわずかに顔をゆがめた。しかしすぐ、真顔に戻って

「二人ともしっかり頼んだぞ」と言つた。

会長の部屋を出ると、土間はため息交じりに言つた。

「会長も人が悪いわ。私が古い幹部とそりが合わないのを承知の上で言つてゐるんだから」

「でも、華風組は名刀ぞろいで有名だからね。その倉田つて人とも、付き合ひが長いんでしょう？」と、礼似が聞いてきた。

「ええ、華風組ではずつとお世話になつていたらしいわ。一流の職人だつて聞いていたから。昔はあの刃を見るだけでも心が躍つたものよ。私が組に入つて二、三年で砥ぎの仕事から身を引いてしまつたけれど、あれほどの人はめつたにいないでしょうね」

「それじゃあ、組長の土間が調べない訳にいかないでしょ。それにしても私に面倒見させる若い奴つて……」

礼似がそう言いかけた時、若い女性が目の前にやつてきた。ぺこり、と言つた感じに頭を下げる。

「礼似さんですね？ 初めまして。私、香です。会長に礼似さんの手伝いをするように言われました」

「え？ あなた？ 女の子なの？」礼似は面食らつた。

「いけませんか？ 礼似さんも女ですよ」

「会長が若い奴つて言つたから」

「若いですよ私、二十一です。前から礼似さんの噂は聞いていて、是非、礼似さんの下で働かせてもらいたくて、ずっと会長の周りにくつついてたんです」

「くつついてたつて」

「それはもう、会長の部屋の前から、車に乗り込むまで、トイレの前だつてくつついてました。中に入ろうとしたら、さすがに怒鳴ら

れましたけど」

礼似是啞然とした。なんて度胸の持ち主だろう。あの会長にくつついて、トイレの中まで追っつけた？　ちよつと普通の神経ではない。横で土間が笑いをこらえて苦しげに震えている。

「で、ずーつと礼似さんの弟、じゃなくて、妹分にしてほしいとお願いしてたんです。やつと念願かなって許可が下りたって訳です。これからよろしく願います」香はあらためて頭を下げた。

なるほど、何故あの時会長が、一瞬顔をゆがませたのかが解った。笑いをこらえていたのだ。これは、ていのいい厄介払いと言う訳か。確かに会長は人が悪い。

それに、何だかこの子は自分と同じような匂いがする。嫌な予感がするわね。これは。

「これから護衛に出かけるんですよ。移動はバイクですか？」

「大した距離でもないのに、いちいちバイクに乗らないわよ」

「なーんだ。がっかり」まるで行楽気分の香が言う。

「じゃあ、あんたも乗るの？」

「もちろんです！　だから礼似さんに憧れてるんじゃないですか！　年寄りの護衛じゃ乗る機会はなさそうだなあ。ま、いいか。せっかく妹分にしてもらったんだし」

「ちよつと、妹分にするなんて一言も言っていないわよ」

「会長から許可は貰ってますもん。たった今から妹分です。じゃあ行きましょか。倉田ってお爺さんのところに」　そう言って香は元気よく歩きだした。今は完全に笑い出してしまった土間をしり目に、礼似是後を追って行った。

一方、御子と良平はあいさつ回りに忙しい。今日は由美の元を訪れていた。

「先日はこてつ君を連れ回したうえに、ろくろく挨拶も出来ずに、大変失礼いたしました」御子が頭を下げる。

「そんなこと気にしなくていいのに。こちらが婚約者の方？」由美が良平に視線を向けた。

「初めまして。良平と言います。以後、お見知り置きを」良平も挨拶する。

「今は式の準備で忙しい時でしょう？ ごめんなさいね。うちの主人、私が主人の仕事がらみで冠婚葬祭に出席するのをとても嫌がるの。本当は私も行きたいのだけど……」

御子と良平は、こつそり視線を合わせる。それはそうだ。こんな席に出られたら、会長の職業が一発でバレてしまう。

その上、由美の顔も知れ渡り、由美の危険も一層増してしまうだろう。間違っても会長が由美を出席させるはずがなかった。

「御子さんは主人のお友達の真柴さんの娘さんになったんだから、個人的なお付き合いも深いのに、本当に頑固な人で」

まずい、あまりこの話を引っ張りたくない。そんな気持ちで御子は、急いで話題を変えた。

「あの、こてつ君は今、どうしてます？ 庭で遊んでいるのかしら？」

「あら、こてつならすぐそこで寝ているわよ」

「え？」

確かにこてつは御子のすぐわきの足元に寝ていた。……かなり変わった寝姿で。

「あ、あのう。こてつ君って、いつもこの姿で寝ているんですか？」

御子が思わず聞いたのも当然で、こてつは普通の犬の寝姿ではな

かった。

まず、犬があまりやるとは思えない……それだけリラックスしているのだろうが、お腹を上に向け、仰向けに寝ていた。その下にはこてつにぴったりサイズに作られたと思われる、クッションが敷かれ、さながらベビー布団に寝かされた赤ん坊のようだ。さらにそのお腹の上にはタオルまで掛けてあった。

しかも、犬なら多少なりとも身体をよじるなどしそうなものだが、こてつは顎を上に向け、前足を揃え、後ろ足は完全に開ききった状態のまま、真っ直ぐにそろえられている。いや、この寝姿全体が、まさに真っ直ぐに行儀のよい(?)状態である。

苦しくはないのだろうか?と二人は一瞬心配したが、よく見るとこてつはすやすやと寝息を立てている。さらにはにっこりと……この犬にはこの表現がともしっくりくる……にっこりと笑って眠っていた。

これは本当に柴犬なのだろうか? 御子と良平がまじまじと見つめていると、由美が

「かわいいでしょう? この子の寝顔を見ると、時々、私、この子を産んだんじゃないかって、思えるときがあるのよ」と、顔中を崩して笑っていた。

こてつのあまりに人間臭い寝姿に、二人は返事をする気もうせて、「ははは……」と笑って見せるしかなかった。

それでも御子は何とか気力を引き出して、由美に切り出した。

「あの、ごあいさつのついでと言っては何なんです、ちよつと、お願いがあるんです……」

「あんだ、なんでこてつ組に入ったの？」

とりあえず礼似是聞いて見た。こんな世界に入る者はあまり過去を話したからない者も多い。返事は期待していなかったが、香はあつげらかと答えた。

「一言でいえば勢いかな？ 父親もこの世界だったし、母親もスリだったし。中学の時暴走族に入って礼似さんの伝説を聞いたんですよ。高校も行く気はなかったのに親に無理やり入れられてね。家出は繰り返したけど一応卒業したんですよ。結構我慢強いでしょう？」

「どこが？ と思いつつも礼似是黙る。さつさとやめた自分が言える義理ではない。」

「それで就職はしたけれど、やっぱり居心地悪くてね。とつとやめて流れてるうちに、こてつ組の門をたたいたって訳」香の話聞き終えて、礼似是確認した。

「……大体はホントだと思うけどね。二、三割は嘘が混じってるでしょ。親がこの世界っていうのは嘘ね。高校も自分で行ったから、かろうじて卒業までこぎつけたんでしょう？」

香は真顔になった。

「へえ……。嘘つくだけじゃなく、人の嘘も見抜けるんだ。さすがですね。確かに父親はこの世界じゃないわ。……その方がましだったけど」香の表情が一瞬揺らぐ。

「別に経歴調査しようってんじゃないからかまわないわよ。何だか見当がついたし。まったく会長も人が悪いわ。あんたも私の過去なんか共感したら、この先苦労が絶えないわよ」

そう、香の過去は礼似の過去に、瓜二つとっていいほど似ているのだ。だから香は礼似に憧れて、会長は礼似にこの娘を任せたのである。

しかも環境がそうさせたのだろうか？ この娘も天性のうそつきだ。多分ここに来る前は、詐欺師まがいのをやっていたに違いない。自分と同じように。

嫌な予感は的中する物なのよね。礼似はため息をつく。

「今更過去はどうでもいいわ。私と仕事をするなら、私に嘘はつかない事。私を信用しろとは言わないけど、私の仕事は信用してもらわよ。じゃなけりや妹分にはできない」

「じゃ、妹分として認めてもらえるんですね」

「とりあえずはね。私はあんたを信用するわ。これからは詐欺はダメよ。もちろん美人局も」

「私、そこまではやってません。ちょっと大げさにセールストークしただけです。自慢じゃないけど、援交だってしなかったんだから」
確かに自慢することではない。しかし、自分も人に説教できる立場じゃない。何とも面倒な娘を押しつけられたものである。

それでも彼女の自分に対する憧れは本物のようだし、それほど人間がひねくれているとも思えない。嘘は必死さの表れでもある。本当にひねてしまえば、嘘なんてつく必要はないのだろう。嘘は自分を守るための盾である事を礼似は良く知っていた。この娘も嘘と強がりを差し引けば、いたって普通の娘に違いないのだ。

仕方がない。しばらく面倒を見るしかないか。会長がほくそ笑む顔が見えるようだと思いながらも、礼似は香と行動を共にする事にした。

華風組に帰った土間は、さっそく元の女組長に倉田の事を聞いて見た。

「でもねえ。うちも研ぎを頼んでいただけで、個人的な事まではあまり聞いてはいないのよね。この世界ですねに傷を持たない人を探すほうが難しいくらいだし」

元組長も困惑気味だ。とにかく話が古くなりすぎる。そんなに古い恨み事を今更蒸し返す者がいるのだろうか？ もちろん時が解決しない傷も少なくはないのだが。

「確たる話でなくてもいいんです。人づての話とか、噂とか」

「倉田さんの事なら、アツシが一番詳しいんじゃないかしら？」

「アツシさん、ですか」土間の表情が曇る。

「倉田さんに直接砥ぎをお願いに行っていたのは、ハルと……」

言いかけて元組長が、土間の顔をうかがう。

「かまいませんよ。ハルさん？」

「あの頃は、ハルとアツシが、倉田さんに砥ぎのお願いに行っていたのよ。組の中でも倉田さんと親しかったのはこの二人。何か聞いているとすれば、今ではアツシだけでしょうね」

よりによってアツシさんか。しかも話は刀がらみときている。これはひと悶着は覚悟しなければならぬわね。

「解りました。仕方ありませんね。アツシさんに聞いてみます」

土間はため息とともにアツシの元へと向かった。

「と、言う訳で、しばらくの間、私達があなたの護衛を務めさせていただきます。外には見張りの者もいますので、しばらくご不便をおかけしますが、よろしくお願いします」礼似と香が頭を下げた。

二人は倉田の工房に来ていた。怪しいものから身を守るだけなら、

そつと見守ればよいのだが、今回は銃で狙われているので、それは不可能だ。

事前に怪しい者が捕まえられれば良いが、万が一という事もある。それで二人が倉田の部屋や工房に出入りする許可を得るために、挨拶をしていたのである。

「こんなおいぼれのために若い娘が二人も来て守ってくれるのか。これはこてつ会長によつぽどお礼を言わないとな」倉田は楽しそうに笑う。

「だが、本当に危険な時は無理をせんでくれ。お前さんがたと、俺とでは命の重さが違う」

倉田の口調が変わる。視線が真剣なものになった。

「それほどの命じゃないですよ」香がぼつりと言ったが、礼似がキツと睨んで黙らせた。

「お気遣いありがとうございます。十分に注意しますので、ご心配なく」

「そちらの御嬢さんにも、是非、そう思っていてもらいたいね」倉田は悲しそうに言った。

「私、嘘は言つてませんよ」香はむくれ気味に言った。

「解つてるわ。だから余計に達が悪いの」礼似是香を睨んだ。

倉田の工房を出ると、礼似是早速香を注意していた。

「いい？ あんたはね、まだこの世界で命を張るって意味が解つてないの。まずは自分の身を守るようになってやっと一人前。ただ命を投げるなら首をくくろうが、ビルから飛び降りようが、簡単に投げられるわよ。でも、私はそんな妹分はいらないわ。足を引っ張られるだけだもの。昔は私もそうだったから、人の事は言えないけれど、覚悟の足りないあんたの道連れになるのはまっぴらごめんよ」

「礼似さんを道連れになんてしませんよ」

「そう思つてるのはあんただけ。あんたに身を守る気がなければいずれそうなるの。自らの身を守りつつ、組や仲間の身を守るのつて、そう、たやすいことじゃないわ。場合によってはあんたの無駄死にのために、大勢の人が道連れになる可能性だってあるんだから。それを承知の上で自分の身を守り、誰かを巻き込んだ時の覚悟を決めて、生き抜いていくのがこの世界なの。今のあんたにそこまでは求めないけど、まずは本気で自分の身を守ってもらうわよ。命懸けって言葉の意味を、履き違えないでよね」

問答無用。礼似是香に意見させる間もなく、まくしたてる。香はやや、当惑気味だ。

「人の命は軽くないわ。もちろんあんたの命もね。あんたがどんなに命を投げたがっても、私が止めて見せる。じゃなきゃ私も道連れだわ。今回は特にね」

「特につて？」

「倉田さんよ。あの人あんたに何かあつたら、自分が身を投げる気にいるわ。そんな目をしてる。私は倉田さんを守るのが仕事なの。倉田さんにそんな真似されちゃ、私も身を投げるしかない。あんた、

自分の命の重さをもう少し考えてよね」

「まさか、倉田さんはさつき会ったばかりです。なんで見ず知らずのあたしなんか」

「あんたはかなり若いからね。人生に可能性がある。そういう人を守りたいと思う人もいるのよ。こういうことは理屈じゃないの。見ず知らずの人間のためでも命を張る人がいるって事を忘れないで。特にこんな世界ではね」

香が納得したようには見えない。それでも言葉の端々に浮かぶ、礼似の真剣さは伝わったようで、しぶしぶながらもうなずいた。

「じゃあ、まずは狙撃できる可能性のあるところを、徹底的に探しましょうか」

そう言って礼似は隣のビルに入っていく。香も慌てて後に続いた。

「アツシさん」土間はためらいがちにアツシに声をかけた。

「何でしょう？ 組長」

「ちよつと聞きたい事があるの。いいかしら？」

アツシは幹部の中では比較的若い方だ。しかし土間とは一番そりが合っていない。

何かでもめる時は、たいていアツシに突っぱねられて、そこに土間がねじ込もうとするのが、すっかり最近の傾向になってしまっている。しかし、二人のそりが合わないのには、それなりの理由もあった。

「倉田さんが恨まれているかつて？」アツシが聞き返した。

「ええ、今でも、当時でも、そんな話を聞いたことはないかしら？ 倉田さん本人は身に覚えがないようだけど、逆恨みって事もあるし」

「あまり思い当たりませんね。細かい事を上げたらきりが無いんでしょうが、身を引いてこれだけ長く経ってまで恨まれ続けるとは考えにくい。あえて上げるとすれば砥ぎの仕事をやめたことくらいでしょうか？」

「砥ぎをやめた事？」

「それはそうでしょう。あれほどの職人にやめられたら、刀使いは皆、困りましたよ。いくら時代がナイフや銃に移っていったとはいえ、自らの矜持のために刀を手放さなかった者もいる。皆が皆、組長のように考えた訳ではありませんから」

やはり言つて来たか。土間はうんざりする。

アツシは土間が刀を握らない事が気に入らないのだ。

アツシはハルの親友だった。組に入つたのもほとんど同じ時期で、ハルは刀で腕を磨いたが、アツシはもめごとをうまくまとめる政治力が、若い時からずば抜けていた。二人の気質の違いはかえって二人の理解を深めたようで、アツシがまとめきれなかった時は、ハルが出張つて力で抑えつけた。周りはハルがアツシの尻拭いをしていると囁いたが、気のいいハルは

「アツシにまとめられないのなら、誰がやっても同じだ。俺はそういう時のために、腕っ節を鍛えているんだ」

そう笑つて、まるで取り合わなかった。

アツシの方も、ハルが若い新入りの世話を焼いたり、刀を仕込んだりするのをほほえましく見ていて、自分にそっちの才覚がない分、良い刀を探し出したり、倉田のような職人を見つけ出しては協力をしていた。

ハルが世話を焼いていた、カズヒロと言う若者が刺殺され、ハルが思いを寄せたその姉に攻め立てられた時も、ハルを支えたのはアツシだった。

アツシはハルがどれほど刀を大切にしていたかを知っていた。

人のいいハルは、ついに人を斬る事はなかったが、刀は自分の分身だと思っていたらしい。

刀の一振りひと振りの意味を考え、そこに自分を重ね合わせていた。

そんなハルの思いを受け継げる若い者が現れる事をアツシも期待していた。

しかし、そんなハルが斬り殺されてしまい、当時ハルに最も期待されていた若者が、刀を手になくなった。それはまだ若い男性だった頃の土間である。

当時の土間の事情を想えば仕方がなかったとはいえ、いまだに刀

に近づく事さえない土間に、アツシはやり切れない何かを感じているらしく、事あるごとに、土間と衝突してしまうのだ。

「たしかに急に砥ぎの職人を失ったのは、困る事だったのかもしれませんが。でもそれで、これほど長く恨んだりできるものでしょうか？」

「それは解りませんね。私は刀使いじゃありませんから。むしろ、組長の方が解るんじゃないでしょうか？」

アツシは土間を上目遣いでちらりと見た。

「……嫌味を言うのはやめてもらえませんか？ 今度の事は一人の職人の命がかかってるんですから。私はもう、刀使いではありませんよ」

「刀使いではない？」この言葉にアツシは反応した。土間は内心、しまった。と思う。

「ハルにあれだけ、命懸けで仕込まれたのに？ あんたの体には、そのすべてがたたき込まれているのに？」

アツシは丁寧さをかなぐり捨てた。怒りで頬が高揚している。

「私はハルさんじゃありませんよ。ハルさんと同じ生き方は出来ません」

「ああ、あんたはハルじゃない。だが、ハルが自分の心を受け継げるだろうと、最も期待した人間だ。俺には無い、才覚に恵まれた人間だ」

アツシは土間を睨んでいる。完全に喧嘩腰だ。もしかしたらこんな機会を待っていたのかもしれない。長い年月にわたって。

「あんたは確かに多くの物を失ったよ。その点は同情する。しかしハルからそれに負けない程多くの物も受け取ったはずだ。中にはあんたにしか受け取れない物もあつたはずだ。本当ならあんたはそれを生かせるはずだ。さらにはそれを次の奴にも受け継いで行けるはずだった。なのに何故、あんたはそれをしないんだ？ 俺なら、俺にそういう才覚があれば、ハルの遺志を次の奴につないでやる事が出来たのに」

「ハルさんは私に人を斬らない事を教えてくれました」

「人を斬るだけが刀の使い道じゃない！」アツシが怒鳴った。

「あいつは自分が刀を振るの意味を考えていた。組を守る最良の方法を考えていた。あいつの一振りは相手の刃を跳ね返すためだけに存在していた。決して人を斬るための物じゃなかった。お前には解っていたはずだ。一番解っていたお前が、何故、ハルの生き方を否定するような真似をしているんだ！」

怒鳴りながらもアツシの目は悲しい色をたたえていた。軽く息が切れている。

「否定している訳じゃありません」土間が答える。

「だったら、何故、刀を握ろうとしない」

そう問われて、土間は遠い目をした。

「私は、ハルさんのようには成れないから」

そう言つて、土間はアツシの目をしっかりと見据えた。

「昔、私はハルさんに憧れました。初めは刀の腕と腕っ節に。そのうち、優しさと器の大きさに憧れました。ついには嫉妬に苦しむほどでした。でも、いつかは自分もハルさんの様になれたら、と、いつも思っていました。ハルさんは自分が刀を握る意味をいつも考えていたと言いましたよね。悲しい事に私にはそれが出来ないのです」

「出来ない？」アツシは啞然として聞き返した。

「私は刀との相性の良さがあだとなつて、握ると先に身体が反応します。考えている間がないのです。これがあなたの言う才覚と言うのなら、私はそれを呪いますよ。この、刀との相性に、私はどれほど苦しんだか」

土間は自分の手に視線を落とす。

「この相性のために、私は人や、自分の身を何度も危険にさらしました。あの頃はハルさんさえも、私に刀を持つなと言いました。それで私が荒れた事はあなたもご存じでしょう？ それでもハルさんは私に冷静さを取り戻せる所まで、引っぱり上げてくれました。でもそれは自分と人の身を守るためであり、恐怖心に打ち勝つための物でした」そして、視線をアツシに戻した。

「私の刀はハルさんのそれにはまるで及ばないものなんです。おまけに私の心は弱い。いつも楽な方へと流される。それは今でも大して変わっていません。それでも私が人を斬らずに済んだのは、ハルさんが、お前に人は斬れないと、言い続けてくれたからなんです。まるで呪文のようにね」

「呪文……」アツシがつぶやいた。

「そんな人間が、いったい何をつなごうっていうんです？ ハルさんの心は、ハルさんにしか伝えられないんですよ。私もあなたもハルさんからたくさん物を受けつとった。それは伝えられる物もあれば、伝えられない物もある。伝えられる物は私も伝えたいと思っています。けれどそれは不完全な刀の腕なんかじゃないんです。私はハルさんの呪文を大切にして生きていくしかないんですよ」

「ハルの心は、ハルにしか伝えられない……」

「そうですよ。だから人の命は重いんだわ」

話しながらも土間は、ハルの失われた命の重さを想う。

「それに私なんかより、アツシさんの方が、よっぽどハルさんの事を伝えられます」

アツシはしばらく考え込んでいた。

「いや、俺にもやつぱり伝えられない。さっき俺はハルの刀は相手を跳ね返すためにあると言ったが、きつとそれだけじゃ無かったんだろう。だから組長に呪文がかけられたんだ。斬られそうになる相手の心を伝える、何かがあったんだろう」

「それはハルさんにしか伝えられませんでした」

「そうだな……あいつは大きな奴だった」アツシは大きくかぶりを振った。

「いや、すいませんでした。興奮して。俺は組長に嫉妬してましたから。みつともないもんですね、大の男の嫉妬つてもんは」

「いいえ、私も気持ちは解ります。私は女になってしまいましたけど。ハルさんが最後に呼んだ人の名前、誰だと思えますか？」

「さあ。その場にいらしたんですね？ 組長じゃ無かったんですか？」

土間は首を振った。

「カズヒロさんですよ。カズヒロにあえるかなと。あの時私の名前を呼んでもらえず、余計私は無謀な気持ちになったんでしょうね。」

私もカズヒロさんには嫉妬していますよ。もしかしたら私はカズヒロさんの代わりだったんじゃないかってね。富士子はそれを知っていて、最後に真っ先に私の名前を呼んでくれました」

「組長……」

「ハルさん、最後にカズヒロさんのお姉さんの事を想い浮かべたのかも知れませんか」

アツシはハルの悲しい恋を知っている。それは土間の知らないハルの姿だ。

「組長、それでもあなたはいつか刀を握ると思います。人を斬らない心を、ハルの呪文を誰かに伝えるために」

「予言ですか？」土間は笑った。

「違います。あなたはハルの心を伝えずにはいられないはずだ。今は無理でも、いつかはそういう気になるはずです。それだけですよ」

前の日から散々調べつくした揚句、礼似と香は倉田の工房にもつどつていた。

「おかしいわね」礼似がつぶやく。

「どうしたんですか？」香が聞いた。

「この辺で倉田さんを狙撃しようとするビル陰になって、しっかり狙えるところってほとんどないのよ。両隣のビルだって、全部テナントやオフィスが入っていて、怪しい人間が潜り込める隙がないわ」

「じゃあ、もつと近距離から狙うのかしら？」

「それも考えられるけど、銃って使えば目立つ。音は大きいし、弾痕は残るし。じゃあ、そんなこと気にしてないのかって言えば、今までは姿を見られずに逃げおおせてる。ナイフで襲った時ですら、顔を見られていないのよ。矛盾してるわ。なのにガラスを派手に拳銃で撃ち抜くなんて、まるで脅しをかけてるみたい。本当に倉田さんを狙う気があるのかしら？」

「狙ってるふりをしてるんでしょうか？」

「何だかそんな気がするわね。倉田さん、何か脅される心当たりはないんですか？」

「俺を脅しても一文の得にもならんがね。親兄弟もこの世にいないし、金目の物もない。刀が何本か残っているが、特別価値のあるものじゃない。義足は本人には大事な足だが、他人には何の値打もな

いものだ。全く見当がつかんよ」

「本人の大事な足？」香がふとつぶやく。

「良平さんって、真柴の電光石火って呼ばれてる人ですよね？」

「そうだけど」

「良平さんの義足って、特別なんですか？」香が倉田に聞いた。

「ああ、確かにあれは特別だ。俺の作る義足は俺が昔といた刀で足を失った奴らがまた歩けるようにと作ってるんだが、そんなやつらはたいてい足を洗って普通に暮らしているから、あくまでも普段歩く事を考えて作っているんだ。しかし良平の場合は銃で撃たれて弾が貫通せず、危険な状態だったんでやむなく足をあきらめた。それでも元の通りに組を守りたいとあいつに頼みこまれて安定性は悪いが、普通の足以上に可動性が高い義足を俺が考えて作ったんだ。だからあの義足はあいつにしか使えない代物だし、あいつはいまだに電光石火でいられるんだ。それで俺は、万が一のためにあいつに予備を作るうと思ったんだ」

ここまで聞いて、さすがに礼似も気が付いた。

「本当に狙われてるのは良平の方じゃないの？」

「良平が？　なんでだ？」倉田の顔色が変わる。

「だって良平が御子と一緒にになれば真柴の次の組長だもの。数少ない心を開ける相手の良平に何かあれば、千里眼の御子にとっては大打撃だし、真柴組長にとっても二人は我が子も同然よ。下手をすれば真柴組の屋台骨を揺るがしかねないわ」

「でも、真柴組って決して大きなところじゃないし」と、香が言いかけたが

「大きくはないけれど、安定したいいいシマを持ってるからね。最近やつかみ半分で、目の上のたんこぶみたいに言う連中が、うちの中にいるみたいなの。ひょっとしたらこの間の合併で、幹部に成りそこなつて不満を持った輩が、本気で真柴を乗っ取って、こてつ組に反旗を翻すつもりかもしれないわ」

「おい、それが本当なら、そういう輩は利用されやすいぞ。こてつ

組に反会長派はいないか？　もし、そんな奴等がいれば簡単に煽られて、多少の無茶はやりかねん」倉田が礼似に聞いた。

「解らないわ。こてつ組は組織が大きすぎて、いろんな噂が流れては消えていくから、本当のところはなかなかわからないのよ。でもこれで倉田さん自身よりも、倉田さんの作る義足と、良平が狙いなのは解った。早く二人に連絡した方がいいわ」礼似は携帯で御子にダイヤルした。

「もう！ 繋がらない！ こんな時になんで電源切ってるのよ！」
礼似は物言わぬ携帯に文句を言う。

「でも今までの話って、全部憶測ですよ。何か証拠があるって訳じゃないし」と、香は言ったが

「憶測でも何でもいいのよ。別に犯人探しが目的じゃないんだから二人に危険が迫っているかもしれないなら、早くそれを知らせないと。言ったでしょう？ 命は軽くないって。誰にどんな迷惑がかかるよりも、二人の無事が最優先なの」喋りながらも礼似はリダイヤルしていたが、電源が切られているのか、繋がらなかった。

「まさか何かあったんじゃないでしょうね」礼似が携帯を睨みつける。

「落ち着きなさい、式の前の忙しい時だ。たまたま電波の届かない所にいるのかもしれないし、電源を入れるのをはばかりる状態かもしれない」倉田が礼似を落ち着かせようとする。

「婚約者同士だしねえ。お取り込み中なんじゃないの？」香のんきな事を言う。

「いいわ、私、真柴組に義足を届けて来る。倉田さん、採寸はもうすんでいるんですか？」

「もちろんだ。あんたらがいるおかげで落ち着いて仕事出来る」「光荣です。じゃ、香、しっかり倉田さんを守ってよ。倉田さんの腕も狙われているかもしれないんだから」

礼似は香がうなずくのを確認すると、義足を持って飛び出していた。

まったく！ 心配かけてホントに取り込み中だったら、二人ともただじゃおかないからね！

さて、礼似が飛び出す三十分ほど前にさかのぼると、御子と良平

は真柴組長と共に、式場での打ち合わせが済んだばかりだった。

式場を出た所で、良平が御子に目くばせをする。

「お義父さん」御子が組長に声をかけた。

「どうした？」答えた組長はくすぐったそうな顔をしている。いまだに御子に「お義父さん」と呼ばれる事に慣れずにいるのだ。御子の方でもそれを面白がって、やたらと使っているのだが。

「私達、これら寄りたい所があるので、タクシーで先に帰っていてくれませんか？」

「そりやかまわんが。良平は今、義足がなくて不便だろう。義足が戻ってからじゃダメなのか？」

「ううん。どうせ車だし、大した用事じゃないから。夕方までには帰ります」

そう言って御子は良平を支えながら、駐車場の方へと歩いて行った。

組長は珍しいなと思いつつも、まあ、組に戻れば人も多い事だし、二人でゆっくり話したい事でもあるんだろうと考えると、タクシーを捕まえて、一人、組へと戻っていった。

二人はその姿をこっそり確認すると、自分達の車に乗り込んだ。

「おい、携帯の電源、切っておけよ。急にかかって来て会話がばれるかもしれない」

「あ、そうか。はいはい」良平に言われて御子が携帯の電源を切ると、良平は車を街はずれの方に向かって走らせる。

「うまく仕上がってるといいけど」

「大丈夫だろ？　かなり細かく注文したし、腕は会長の奥様のお墨付きだ。散々探し回った甲斐があったってもんさ。組長もきつと喜ぶぞ」

「こういう時でないとなかなかできないものね」

「機あつて大事だよな。いつでもできると思うと、人間何にもないもんだ。時には形に残すことも必要だな」

「そうね。楽しみだわ」

「仕上がりがか？」

「お義父さんよ。どんな顔するかしらね」
そう言って御子はくすくすと笑った。

「組長、あらためて倉田さんの事です」

土間が事務所で倉田に関する資料に目を通してしていると、今度はアツシの方から声をかけて来た。

「倉田さんに狙いがなくても、刀の方はどうなんでしょうか？」

「刀？ 倉田さんの手元にそれほど貴重な刀があるの？ 聞いて無いです」

「刀の価値なんて使う者次第ですよ。金の価値は関係ありません。思い出したんです。昨日の話で。倉田さんの手元に、ハルの刀があるかもしれません」

「ハルさんの刀？」

土間は驚いた。ハルの使っていた刀は、誰もそれで人を斬る事がないようにと、土間自らがハルの墓の中に納めたのだ。

「あの頃のハルが使っていた刀じゃありませんが、若い頃ハルが使っていて、組長に渡すつもりが、ハルの葬儀の後に探したんですが見つからなくて、きつと、砥ぎに出したんだろうと思ってました。いずれ落ち着いたら取りに行くつもりが、倉田さんが砥ぎをやめたり、富士子さんが亡くなったりしたごたごたで、すっかり忘れていたんです。決して名刀と言う代物ではありませんが、使い勝手のいい刀だと聞いていました。刺す事のない組長にはうってつけだと」

「その刀が倉田さんの手元にあるの？」

「おそらく。他にもそういった、誰かが持てば相性のいい刀があるのかもしれませんが」

「それを狙って？ でもそれで倉田さんが襲われるのかしら？」

「刀を狙ってるんじゃない、刀を相性のいい誰かに持たせたくないんじゃないでしょうか？ ましてや、倉田さんに砥がせたくないのか」

そうか、他の武器とは違って、刀は持つ者の技量が問われる。誰にでもそれなりの力になる銃などとは違って、普通の者が持つても大した役には立たないが、それなりの腕の者に持たせれば、驚異のある武器になるのが刀というものなのだろう。

ましてや、刀によってそれほどの相性というものがあるのならば、わざわざ刀使いに持たせたくない刀もありそうだ。それに倉田の手元にあるであろう、ハルの刀の事も気になる。

「行きましよう。倉田さんの所へ」

土間はそう言っ て立ちあがった。

「どこに行つたか解らない？」礼似是真柴組の玄関前で途方に暮れていた。

「夕方までには戻ると言っていたようですが、組長にも行き先は告げなかったようです」

真柴組について、二人の行き先を聞いた返事がこれだった。

何だつてこんなタイミングでふらふらしてるのよ。礼似是心の中で歯がみする。携帯に再度ダイヤルするがつがらなかった。

どうしよう。義足だけ置いて、一旦、倉田の工房に戻ろうかと礼似が思案していると

「れ、礼似さん。み、御子と良平なんですが」奥からハル才が顔を出して言う。

「い、一時間たつても、じ、自分達が、れ、連絡しなかったら、ここへ来てくれたって、言われてるんですけど」

そう言つて、御子の字で書かれたメモを渡される。

「二人はあんたに連絡していたのね？ 最後の連絡はいつ？」

「に、二時四十五分頃です」

「今、三時半か。でもなんだか嫌な感じがする。このメモの場所にすぐ行ってみましょ。街はずれみたいだから時間もかかるし。ハル才、組長に言つて、若い奴数人と車を用意してくれる？」

ハル才は慌てて組長の部屋へと向かった。

工房に残った香は倉田の作業を見守っていた。倉田はコツコツと手間のかかりそうな作業を手際良くこなしていく。その手技は素人の目で見ても、簡潔で、流麗なものに見えた。

ある程度の目途が付いたのか、倉田はホッと息を突くと、その手を止めた。

「一段落出来たんですか？」香は倉田に聞いた。

「そうだな。ひとまず形は見えた」

「それならお茶でも淹れましょうか？のど、乾いたんじゃないか？」

「お茶ぐらいなら自分でいれるさ」

「ご遠慮なく。どうせ暇を持て余しているんですから。このまま暇なのが一番ですけど」

「いや、まったくだ。じゃあ入れてもらおうか。その戸棚に全部入ってるよ」

「解りました」

香がやかんに火をかけ、急須や湯飲みを出す。その姿を倉田はぼんやりと見ていた。

「人にお茶を入れてもらうなんて、何年ぶりかな」倉田が感慨深げに言う。

「もう、ずっとおひとりなんですか？」お茶を淹れながら香が聞いた。

「そうだな。俺みたいなのは一人が一番いいと思っていたが、人なんて弱いもんで、昔、刀を研いでいた頃に一緒に暮らした奴がいたよ。ただ、そいつも巻沿いを食いそうになってさすがに出ていったがね。それでも命が無事でよかったよ。俺は親父を殺されてるからな」

「お父さんもこの世界だったんですか？」

「俺の親父は刀鍛冶崩れでね、刀を作る事より、使う方に夢中になって、若い頃は散々悪い事をしていたらしいんだ。そのうち砥ぐ方に力を入れ始めたらしい。俺は親父に刀の振りと、人斬り道具の砥ぎの技術を仕込まれたんだ。そんな事やっていれば恨みを買って当然だ。殺されて文句の言える親父じゃ無かったよ。刀研ぎが刀で殺されたんだ。本望と言えば本望だったと思うがな」

話を聞いていた香の手が止まった。わずかにその手が震えている。「刀で殺された刀研ぎ……」呆然と倉田を見る。

「そんな話が、狭い世界にゴロゴロある訳ない。お父さんが殺され

たのは三十年くらい前の話ですか？」

「あんた、まさか」

「私、殺し屋の娘です。きっと、倉田さんのお父さんも、私の父の手にかかったんだと思います」

香は青ざめた顔で言った。

「まいったな、こりゃあ」倉田は頭を抱えた。

「いや、あんたには全く関係ない話だ。その頃当然、あんたは生まれてないだろう。それにあんたの父親も、とつくに死刑になったはずだ」

「私が小学生の時でした」

「そうだろうな。あいつが殺したのは一人や二人じゃ無かった。死刑になって当然だ。しかしまさか、娘がいたとは」

「私も生まれてきて損をしたなと思ってますよ。私はあなたの仇の娘って事になりますね」

「仇？ 馬鹿言っちゃいけない。親父は殺されても仕方がない事をやってた。ましてあんたを恨むのは筋違いだ」

「でも、私の血の中には殺し屋の血が混じっています。あの男がこの世にいない以上、他に憎める相手はいませんよ」

「今更憎む気もないさ。あんたは勘違いしてる。人は憎しみなんかなくたって生きていけるもんなんだ。あんたの境遇は察しがつくが、あんたの世界はまだまだせまい。広い世間にはもっとたくさんの人間がいるんだ。こんな世界にいれば色々割り切れる奴もいるんだよ。俺のようにな」

「憎んでくれた方が良かったのに」香は悔しそうに言う。

「そうすれば、あの男と一緒に憎める仲間にもなれるのに」

香の目はまるで何かにすぎるような目になった。

「そんなに父親が憎いのか？　すでにその命で罪を償っていても？　香は黙ってうなずいた。

「あんたはそれでこの世界に入ったんだな。俺はあんたが気に入ったよ」

「気に入った？」香は驚いた。

「ああ、気に入った。あんたは自分の境遇や、世間の目にただ泣くだけの娘じゃない。ただ、一つだけ気に入らない所がある。生まれた事を後悔している事だ。人が生まれてくるのにはちゃんとした理由がある。俺とあんたが出会ったこともそうだ。これで俺は何としてもあんたに無茶をさせたくなくなつた。あんたもこんな因縁のある俺を目の前で簡単に死なせたくないだろう。違うか？」

「憎み合う仲間にはなつてくれないんですか？」

「守りあう仲間だよ」倉田は答える。

「あんたの中には俺への罪悪感が……それほどの感情では無くても、何か因縁めいた感情が出来たはずだ。それは俺も同じだよ。だから俺はあんたを守りたいと思う。あんたもそれは同じだろう。俺達は守りあう仲間だ」

「あなたの親を殺した男の娘でもですか？」

「そんな事は関係ないさ。あんたはあんただ」倉田はきっぱりと言った。

陳腐な台詞にもかかわらず、その真つ直ぐな物言いに、香は心を貫かれる。この人は本気で言っている。それが肌で感じられた。

「こういうことは理屈じゃないの」礼似の言葉を思い出した。

「俺が生まれて来た理由は、こんな世界がある事を知って、義足を作り続ける事なんだと思ってる。俺は気づくのに随分時間がかかったが、あんたはまだ若い。早く気付く分だけ可能性が広がるだろう。だから若い命はそれだけ重いのだ。ましてや俺はあんたとの因縁を感じてしまった。俺はまだ生きるよ。もっと義足を作り続ける。あんたも自分の道を探すといい。そうすれば生まれた事に感謝できるよになるだろう」

「私はこの世界でしか生きられません」

「それでもいいさ。問題は生きる姿勢だよ。間違つても自分の命を軽く見ちゃいけない。とりあえずは俺のために自分の身を守ってくれ。それがあんたに望む、唯一の望みだ」

その時、表の戸が開く音が聞こえた。

「礼似さんが帰って来たのかしら？」立ち上がるうとする香に

「待て、急に出ちゃいけない」と、倉田が制した。

「なかなかいい勘してるじゃないか、倉田」戸口から長身の男が顔を出した。

「関口か」倉田の表情がこわばる。

「誰なんです？」香が倉田に聞いた。

「刀使いさ。俺が昔刀を研いでやっていたんだ。今じゃ誰にでも雇われる嫌な野郎だ」

「久しぶりだな。そう嫌そうな顔しなさんな」関口と呼ばれたその男の手には刀が握られていた。

「表にいた見張りの人たちをどうしたの？」香が関口を睨んだ。

「こんな真昼間に道端で無駄な殺生はしねえよ。気を失ってるだけさ。それより倉田。あんたに渡してもらいたいものがある」

「何だ？ 言っとくが俺の手元にお前の役に立つものはないぞ」

「役に立つかどうかは俺が決めるさ。ここに春治の刀があるはずだ。そいつを渡してもらおうか」

関口は刀を抜いて凄んで見せた。

「あれはお前の役には立たん」

「俺が決めると言ったろう？それに俺の役に立つかは問題じゃない。その刀を華風組の組長に渡したくないのさ。誰もがすっかり忘れていたものを、馬鹿な野郎があんたに余計な脅しをかけたんで、華風組が刀の事を調べ出した。俺はわざわざ刀使いが増えるのを、見過ごしておくほど人が良くないんだ。俺の仕事がやりにくくなるんでね」

「お前、こてつ組にたてつく気か？」

「そんなの知ったこっちゃないさ。俺は雇われ仕事をするだけだ。それに、こてつ組だって一枚岩って訳じゃない。あそこは大きな

りすぎた。今に必ずひと悶着起こるだろう。その時に目の上のたんこぶが増えるのはまっぴらなんだよ」

「やはり、反会長派がいるんだな」

「だからいい勘してると褒めてやったのさ。さあ、さっさと春治の刀を出してもらおうか」

関口が二人に迫ってくる。倉田は工房の奥から、何本かの刀を出してきた。

「年取って物分かりがよくなっただじゃねえか、倉田」

関口がそういった瞬間、倉田は刀を一本鞘から引き抜いて関口に斬りかかる。関口が後ろに身を引くと、香も残りの刀を関口に投げつけ、倉田の手を引いて表へ飛び出そうとする。

しかし関口も素早い。すぐに二人を追いかけ、刃を二人に振り下ろしてくる。とっさに二人は互いをかばい合った。香は思わず目をつむる。もう間に合わない！

ガキッ。

嫌な金属音がして、香は恐る恐る目を開けた。自分達の前に、土間が立ちはだかっていた。

「土間さん！」

「間に合ってよかったわ。倉田さん、この刀、ちよいとお借りするわよ」

見ると、土間の手に刀が握られ、鞘からわずかに覗かせた刃の根元で関口の刀をせき止めている。

土間はそのまま弾みをつけるようにして、関口の刀を跳ね返すと、鞘を引き抜き、関口の態勢を立て直す間も与えずに身ね打ちにしまった。関口がどさりと倒れる。

「二人とも大丈夫？」土間が聞いた。

「大丈夫です。ありがとうございました」香が息を整えながら言っ
た。

「居合抜きが決められずに組長さんに助けをいただくなんて。俺も
もう年だな」倉田も肩を落とす。

「あなたは研ぎの専門ですもの。今は腕のいい、義足作りの職人で
すしね」土間はほほ笑んだ。

「こちらに伺ったのは他の用があつての事なの。こちらにハルさん
の刀があると聞いたので、見せていただけないかと思って」

「ハルさん？ 春治から預かった刀の事ですか？」

「ええ、そうです。やっぱりこちらにあるんですね」

「それですよ」倉田は土間の方を向いて言った。

「え？」

「今、組長さんが握っている刀。それが春治から預かった刀ですよ」

「これが、ハルさんの刀」土間は刀をまじまじと見つめた。

「この刀はかなり特殊だね。組長は今、この刀の一番いい使い方を
したんです。こいつは人に深手を与える斬れ方をしないんです。斬
つて斬れない訳じゃないが、傷は浅くなる。固めだから相手の刃を
跳ね返したり、身ね打ちにするには使いやすい。刺すには向かない、
こいつは人を守るための刀なんです」

「人を守る刀……」

「だから、こいつは春治にしか使えないと言ったんですが、春治の
奴、こいつを弟分にくれてやると言い出したんです。こんな刺せな
い刀、へたすりや命にかかわるって言つたんですが、大丈夫だ。そ
いつは刺すようなまねは絶対にしないから、って言つて、俺に砥ぎ
を頼んで行つたんです。その後春治が死んでしまって、そのままにな
つていたんですがね」

ハルさん、ああ、ハルさん。あんたは私にこれを残してくれてたんですね。繰り返し呪文を唱えてくれた私のために。カズヒロさんではなく。

土間の視界が、一瞬、涙でかすむ。

「これはハルさんが私のために残してくれた刀です。今まで預かっていただいてありがとうございます。私は決して、人を斬ることはごさいません。この刀は私が使わせてもらいます。ハルさんの遺志を、私が継ごうと思います」そう言って土間は、倉田に深く頭を下げた。

一方礼似は車の中で、苛々と携帯を何度もダイヤルしていた。ハル才も自分の携帯が鳴るのを待っている。もうすぐ約束の一时间だ。そしてついに通話が御子につながった。礼似はホッとした。

「ちよつと、あんた達何やってんのよ。ひよつとしたら良平が狙われてるかもしれないのに」いきなり礼似はまくしたてた。

「良平が？　どういう事？」御子が聞き返す。

「倉田さんが言ってたの。こてつ組に反会長派がいるんじゃないかっつて。私も倉田さんを襲っているように見せて、本当は良平に義足を使わせたくないんじゃないかと思うのよ。今、あんたが残した住所の写真館に向かっているから、義足を受け取って頂戴。連絡が付いて良かったわ。香ったらあんた達に取り込み中なだけだなんて言っつて」

「ごめん、礼似」御子が礼似をさえぎった。

「これからしばらく、ホントに取り込むことになりそうだわ……」写真館の駐車場で、御子と良平は突然、男達に囲まれてしまった。御子はそのまま、携帯の通話を切った。

「あんだ達が礼似の言ってた反会長派？」

御子は自分達を取り囲んだ男達に聞いた。

「随分と早耳だな。もうそんな話が出回っているのか」御子の正面にいる、細身の男が答えた。

こいつが中心人物か。御子は男を睨みつける。良平は御子の肩につきまわりながら立っていた。

「まあね。情報の早さはちよつと自慢なの。良平のドスさばき程じゃないけどね」喋りながら御子は、良平が懐のドスを確認しているのを、横目で確かめる。

「さすがは式目前のカップルだな。仲が良くて結構だ」男が油断のない表情のまま笑う。

「それはどうも。妬ける？」そういいながら自分のバッグの中に手を入れ、ナイフを探る。

「ああ、妬けるね。羨ましい限りだよ。式じゃ牧師はこう言うんだっけ？ 死が二人を分かつまで、愛し合う事を誓いますか？」

「悪いが御子は神社の育ちだ。クリスチャンには縁がないね」良平が御子につきまわりながらも、一歩前に出る。

「そいつは良かった。あんたらは幸せだよ」そう言いつつ、男は周りの男に目くばせする。

「二人で一緒にあの世に行けるんだからな」

男のこの言葉を合図に、男達が一斉に二人に襲い掛かった。

「義足がない事を後悔するんだな！」

男の一人が良平に向かってナイフを振りかざそうとした。

「良平！ 左！」御子が叫ぶと同時に良平が左から振りかざされたナイフの刃をドスで跳ね返す。

「上！」他の男が上から振りおろしたナイフをドスで受けると、肘でみぞおちを突きあげる。

「右！」今度は御子が自分のナイフで相手のナイフを跳ね返し、良平が殴りつける。御子はそのまま身体を回転させて、後ろから襲おうとした男を回し蹴りにした。

「そして、後ろ」男はどさりと倒れる。御子の千里眼が怪しく光った。あつという間に四人の男が倒される。

「あんた達、何か勘違いしてない？」御子が言う。

「良平は義足がないと、自分からは襲えないけど、そっちが襲ってくるなら、いくらでも叩きのめせるんだからね」

「あ、足が動かせなけりゃ、逃げるのもままならないだろうが」リーダー格の男が言う。

「逃げる？」御子は男に目を向けた。

「なんで？ 私が横にいるのに？ 千里眼の先読みと、良平の電光石火のドスさばきのスピードがあるのに、なんで逃げる必要があるのよ」御子はせせら笑った。

「お前らぐらいじゃ義足でも十分だが、今は御子が俺の第三の目だ。へたすりゃ全員、切り刻む事になるかもしれないな。俺の義足がない事よりも、御子と一緒に俺を襲った事を後悔することになるぜ」良平もうつすらと笑う。

「守る相手が真横にいれば、俺は動く必要なんかないんだよ。こいつを置いて、何処にいくってんだ」

「私も良平から離れる気はないしね。どうする？ 切り刻まれるまでやるの？」

すると、男達の背後からも声がした。

「それもいいけど、私達と遊んでもらうのもいいかもね。良平だって参加できるわよ。はい、義足。お待ちどうさま」

礼似が良平の義足を持って立っていた。後ろにはハルオや、真柴組の若い男達もいる。

万事休す。男達はそう思ったのか、じりじりと後ずさりした拳句、脱兎のごとく逃げていった。

「もう採寸が済んだのか。さすが倉田さんだ。仕事が早いや」良平が義足を受け取りながら感心した。

「何でもいいけど、こんな街はずれの写真館で、いったい何をしてたのよ」礼似が聞いた。

「お義父さんへのプレゼントを取りに来てたの」御子が紙袋から、写真を取り出した。

「写真？」礼似が写真を開いて見る。

「これって……」

「いいでしょう？ 私が事前に撮った白むく姿に、お義父さんの亡くなった奥さんの写真を合成してもらったの」御子が自慢げに言う。

「隣にちゃんと、組長の袴姿も添えられてるんだ。いい出来だろう？」良平も言う。

「結構苦労したのよ。お義父さん達、式の直前に騒動があつて、式を挙げる事が出来なかったらしいの。そのせいでお義父さん、奥さんに花嫁姿をさせられなかった事をずっと悔んでいたのね。それで、墓前に供えてもらおうと、この合成写真を思いついたんだけど、男の人って記念写真とかに疎いのね。家じゅう探してもろくな写真が無かったの」御子は良平に、そうはならないでよと言わんばかりに視線を向けながら言う。

「それであいさつ周りの時に、あちこち写真の事を訪ね回って、会長のお宅に行った時に、いい写真をいただけたの。で、その時奥様に、そういう写真を作るなら、この辺ではここが一番いいって聞いたもんだから、出来あがるまでお義父さんにばれないようにこっそり用意してたって訳」

「式の前だから注意はしていたんだが、俺と御子ならめつたなことはないからな。かえって組長とか守る人数が増えた時の方が怖いくらいだ。それでも念のためにハルオに連絡は入れていたし。まあ、

騒ぎになったのは悪かったよ。ただ、こういうことは機会がないとなかなかできないからな」良平はすまなそうだ。

すると、今度はタクシーが止まって、中から土間と倉田、香が出て来た。

「あら、ごめん。もう終わってたわ」礼似が三人に向かって言った。
「何よ、人を呼びつけておいて。こっちも大変だったのよ。あんたが倉田さん達をほっぽって行っちゃたから、私が助ける羽目になったんだから」土間がむくれた。

「え？ そっちも何かあったの？」

「のんきなもんね。倉田さんも香も危なかったんだから」

「すいません。私が倉田さんを守りきれませんでした」香が気落ちした様子で謝る。

「いや、そんなことはない。この娘はちゃんと俺を守ってくれたよ。それに自分の身も守った。俺は嬉しいよ。この娘が無謀な事をしなくて」そう言つて、倉田がとりなした。

その様子を見て、礼似は香の心情に何か変化があった事を感じ取った。何かが良い方向に向かったようだ。

「ま……あ、私が二人をほっぽって飛び出しちゃったのが悪かったんだし、土間にも手間をかけたみたいだし。あら？」

礼似は土間が刀を携えているのに気が付いた。

「土間、あんた、刀持って平気なの？」

「ああ、これ？ これは特別なの。私が持たなくちゃいけない刀なのよ」そう、土間は答えた。

「そうなの？ 何でもいいけどそんな目立つもの持って、銃刀法で検挙されたりしないでよね」

礼似はごく、常識的な事を言った。

結婚式当日。普段から家庭的でこじんまりとした真柴家の結婚式は、こじんまりとは行かなかった。何せ、こてつ会長と旧知の仲である真柴組長の後継者たちの式である。

それでも式だけは、本人達の意向を通した。御子は自分が育った神社で式を挙げた。自分を拾ってくれた、亡くなった先代の神主への感謝の気持ちからだ。

今の神主とその家族達はいい顔をしなかったが、ここだけは押し通した。

しかし披露宴となると別物で、まさしく二人の披露の場となってしまう。

こてつ組と華風組の幹部はもちろん、周辺の街の組織や、関係先の幹部達も、こてつ組の周辺の力関係を確認しようと、結構な人数が様々な思惑を持って出席している。

そう言う列席者の集る式なので、いつの間にか会場周辺には私服の警官達がうろついていて、一層ピリピリした空気を醸し出している。

そんな式を引き受けてしまった会場側も、元を取らなきゃ割に合わないとばかりに、様々なプランを押しつけて来たし、自分が式を挙げられなかった上に、写真の贈り物まで受け取った真柴組長が、二人可愛さに会場側のいいなりになってしまった。

その結果、御子と良平は、幾度もお色直しという名の着替えをさせられ、顔もろくに知らない人間達の長々としたスピーチを聞かされ、あつちを向け、こつちを向け、これを持って笑えと指図され、いい加減肩もこり、笑顔もひきつり、疲れ果てた夜も遅くに、ようやく二人は解放（！）された。

「つかれたあ！ 二度とこんな事やらないわ」

会場に使ったホテルのレストランの椅子に、御子は崩れるように座った。

「まったく。もう、こりごりだ」良平もうんざり顔だ。

「なあに？ 二人ともだらしないわねえ。着替えを繰り返し返して、後は殆んどじっとしていたようなもんじゃないの」

礼似があきれ顔で言う。

「だったらあんたも一度やってみなさいよ。裏に引つ込むたびに走って、秒刻みで着替えさせられて、あんなところで仮装して、ライト浴びててごらんさい。じっとしてたって肩がこるから。ああ、お腹もすいた。目の前に食べ物があるのにろくに食べられないなんて、まるで拷問だったわ」そう言いながら、運ばれた食事に御子と良平がさっそく手を付ける。

「主役が話しも聞かずに物を食べてる訳にもいかないでしょ。なんか土間も疲れた顔してるわね」

「まあね、直系の親族にこだわる華風組で、つなぎ以外で傍流の私が組を継いだのよ。何か隙があるんじゃないかって、カマかけて来るのよ。話しをするだけでも疲れたわ」

「組を継ぐって楽じゃないのね。それよりも、はい、良平。倉田さんからの預かりもの」

礼似は大きな紙袋に入った、新しい義足を手渡した。このために二人は残っていたのだ。

「倉田さん、無事に式にこれでよかったわね」土間が二人に向かって言った。

「そうね。今度の事はあるた達に感謝してるわ。でも、倉田さんとろくに話も出来なかったけど」御子は残念そうだ。

「後でゆつくり会いに行くさ。新しい義足の礼も兼ねて」良平が義足に目をやりながら言う。

「でも、倉田さん、楽しそうだったわよ。あんな力チ力チの良平を見る機会なんてめったにないって」そう言う礼似も思い出し笑いを

隠そうともしないでいる。

「倉田さんってホントにいい人なのね。あの人のおかげで何だか香が変わったみたいなの。私からもお礼を言いたいって伝えておいてね」

「解ったわ。それで香は今どうしてるの？ 護衛はもういいんでしょ？」

「それが私にいまだにくつついてるのよ。妹分だからって。とうとう私の部屋に押し掛けてきちゃったの。参ったわ」

「あら、あんた達結構気が合いそうよ。良かったじゃない。可愛い妹が出来て」御子がからかう。

「冗談！ 小生意気な妹になりそうよ。でも、あの娘を守り切れなかった手前もあるし、会長につつま返すわけにもいかないし」

「そうそう、あきらめて面倒見る事ね。まあ、妹って言うより、親子みたいけど」御子がくすくすと礼似を笑う。

「あら、言ってくれるじゃないの。随分と年のいった花嫁が」礼似もやり返す。

「失礼ね、そんなに年じゃないわよ。だいたい今時結婚に年は……」言い返しかけた御子に土間が突つついた。

「何？」

「礼似、いい加減にしてあげなさいよ。やっかんでと思われるわよ。御子もいつまで良平を待たせるつもり？」

「え？」

「礼似ったら、わざと突つかかっているのよ。あんた達今日が初夜だから」

「あ……」御子と良平が同時に赤くなる。

「はいはい、解りましたよ。渡す物も渡したし、邪魔者はさっさと消えますよ」礼似が席を立つと、土間も続いた。

「じゃ、御二人さん。ごゆっくり」

ニヤニヤと意地の悪い笑いを浮かべながら、そう言い残して二人は店を出ていく。

「これは、当分、冷やかされそうだな……」あっけに取られながら良平が言う。

「うん。かなりね……」御子も同意する。

しばらく呆然としていた二人だが、やがて良平が御子に手を差し出した。

「とりあえず花嫁さん。部屋までエスコートしましょうか？」良平が笑いかける。

「そうね。お願いします。花婿さん」御子も笑いながら、その手を取った。

そして二人は手を取り合って、自分達の部屋へと向かって行った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317s/>

こてつ物語 3

2011年8月30日03時35分発行